

献 辞

門田明教授は昭和41年ご赴任以来30年にわたって、本学の英語・英文学分野で教育に専心され、今回愈々定年を迎えられる。ここに先生のご業績を振り返ることは、本学の将来への得難い指針であることを思い、ささやかながら献辞を述べたい。

門田先生の研究分野は、主な所属学会が「日本英学史学会」であることに関連して、主著『カリフォルニアの士魂－長沢鼎小伝』と『若き薩摩の群像－サツマ・スチューデントの生涯』で理解されよう……薩摩の留学生のことを調べ始めて、やがて二十年の歳月が流れようとしている。……生涯に一度、サツマ・スチューデントの一切を語り尽くしたいと思った。……とのご述懐が物語るように、幕末薩摩藩派英留学者15名ことに一行の最年少者長沢鼎について、アバディーン（英）およびサンタローザ（米）での史料収集も合わせて、該博な考証によるライフ・ワークを完成されている。個人伝記の域を越えた総合的な学術的業績として、栄誉ある英学史学会「豊田実賞」をはじめ、南日本放送「MBC賞」などを授与された所以である。

門田先生は御夫人と共に敬虔なキリスト教徒である。地元のカトリック教会の指導者として地域で多くの社会活動を続けてこられたことは知られているが、英学史研究者としての立場と結合して、ザビエル顕彰事業への協力、韓国ミッション・スクールとの交流、さらに当地での日英協会設立など多くの国際交流に参画されて来た。まさしく開明的な大学人として本学の地名度を高められたことにも感謝申し上げたい。

さて門田先生の英語・英文学分野の学生教育について語るのは、専門家に任せるべきであろう。本学の大学改革が諸につき「英文専攻」は「英語英文学専攻」に改称され、カリキュラムは大きく変貌しようとする今日、とくに商業、貿易などの実学的英語の大家たる門田先生が、学生指導の第一線から身を引かれることは、本学にとって苦渋とも言えよう。しかし先生の新しい人生に一層のご発展があることを信じ、御夫人ともどもご自愛の程をお祈り申し上げるものである。

1995年2月 学長 岩切 成郎